

令和5年度 学校関係者評価書(様式)

鈴鹿市立国府小学校		NO.	
評価項目	本年度の活動(具体的な手立て)と指標	学校関係者評価	今後の改善点
学力向上	<p>①4・5年生算数科でTT(チームティーチング)による一人ひとりに応じたきめ細かな授業展開。 ②教職員全員に『国府小学校の授業づくりの十か条』や『ノートへのびき』を配布し、学習規律やノート指導の共通理解。 ③家庭学習充実に向けた、自主学習プリント、読み上げ計算シートの取組。 ④読解力向上に向けた、読む書くワークシート・視写ワークシートの取組。 ⑤図書館教育の充実。 ⑥授業力向上のための定期的な授業参観。(ぐるぐるウィーク) ⑦教職員の授業力向上に向けた定期的な職員研修(自主研修会)の実施。</p> <p>(成果と課題) ○今年度は、教員の欠員により、TT体制を崩した期間も長くあり、継続的な指導ができておらず、十分な検証はできていないかもしれない。ただ、5年生児童にとったアンケートの「授業の内容がよく分かりますか」と「算数科の授業が好きですか」の項目において、肯定的な回答をしている児童の割合が、1学期から2学期に比べ、それぞれ3.1ポイント、0.9ポイント上昇したことから、児童の意識的にもTT指導が効果的だったのではないかと考えられる。 ○今年度から、自主学習プリントコーナーを設置し、児童が自分に合った問題を自主的に取り組めるような場を設定した。ただ、教師が声掛けしなければあまり自分からプリントをとっている姿はなく、子どもたちが主体的に学習に取り組むようにするための手立てを今後も考えていかなければならない。 ○児童の基礎学力の向上をねらって、今年度から全学年で読み上げ計算シートの取組を行っている。低学年では宿題として、中・高学年では主に授業内で実施している。授業内で算数ボランティアさんに協力してもらうと、児童もとても喜んで意欲的に取り組んでいる姿があった。この取組を、算数ボランティアと連携して取り組んでいくこともできないか検討していく。 ○今年度の『ぐるぐるウィーク』では、教員の週予定を貼り出して、教員がお互いの授業の様子を計画的に見合うことができるようにしたこともあり、昨年度以上に授業を見合っていた。また、授業者と参観者で放課後に意見交流の時間をとり、その際に出た意見を全職員で交流したことで、日々の自身の指導力向上にも繋げることができた。</p>	<p>・授業参観したり学習ボランティアしたりすることによって、かつての教え方ではない、実に細やかな配慮が感じられて感心しています。子供たちに「これ以上甘えてはいけません」と言いたいところですが、そうもいきません。学校側の取り組みに感謝します。 ・手厚い支援・TT対応・先生の負担・ボランティアの好意、頭が下がります。 ・算数ボランティアとして授業支援を経験するほど、先生方の熱心さと大変さが伝わり、少しでも手助けできればと微力ながら通っています。 ・アンケート結果「授業がよくわかりますか」3.1ポイントアップは大きい成果である。 ・子どもの進み具合に応じることができると少人数制の授業を実施していただくのは、一人ひとりに目が届きやすい良い取り組みだと感じています。今年度は実施できなかったようですが、昨年度の様子を見てると少ない数の方がよかったですのではないかと。来年度はぜひ実施していただきたいです。(先生がいるのであれば) ・難しくと言われる5年生での少人数教室の実施は過去の取り組みからもその成果が表れていると聞いている。来年度はぜひ復活させてほしい。 ・自主学習プリントコーナーは面白い取り組みだと思います。 ・主体的に自主プリントをするのは難しいのでは、1か月何枚学期に何枚と伝えないと変わらないのではないかと。 ・自主学習プリントコーナーについて、自分にあった問題を自主的に取り組める場を設置したのは評価したい。勉強嫌いな児童がプリントをやってみようと思わせる動機付けや、気軽に取りに行ける環境づくりなど、児童が主体的に取り組む策を考えていく。 ・自主学習プリントコーナーは良いとは思いますが、やはり自主的というのは難しい。与えるだけ与えて終わりとなると子どもたちの意欲など継続のは難しいかと、宿題を減らして自主学習にあてたり、目標をたてて到達したらみんなでレクをするなど、こぼり的なことがあるとやる気がでるのではないかと。 ・自主学習プリントをやらせない子はやらせないで、そういう子には課題を与える方がよいのではないかと。 ・自主学習についても何をしたらよいかわからないと言ってやらせない児童がいると思う。自分で考えるということに慣れてほしいが、とりあえずは始めることが大切。先生がプリントを用意してくれるとやってみようとはじめはみんな手を出すが、慣れてくるとやめてしまふ。これを継続して基礎学力をつけてほしい。 ・基礎学力の向上と読解力の向上、『惜しい』という解答がチラホラ、ちよつとの助言で『すー』と解答、おもしろ味を持ってくれたらと思います。 ・小学校で基礎学力を向上できると中学校での学習も理解しやすくなる。小学校でつまずいたまま中学校に進んだ場合、小学校で学んだことからおやり直しをしないと解くことができず時間がかかる。授業のについていきにくくなってしまふ。 ・学習会に参加したが、最後まで文章を読まない子がいた。わからない問題は何度も読み直すことをが必要と思う。また、漢字がわからない、書けない、漢字の書き順が違う子がいた。本を読ませることが必要。 ・先生方が他の先生の授業を見る取り組みは度々見かけましたが、大変良かった。 ・グルグルウィークで教員が取り組んでいることを子どもたちは知っているのか、先生たちが高めあう姿を子供たちが見て自分たちも友達の良いところを見つけているなどしてほしい。 ・グルグルウィークはとってもよいと思います。見てよいと感じるところは取り入れ、逆にもっとこうした方がよいとアドバイスもでき、子どもたちにも還元されていくと思います。 ・「ぐるぐるウィーク」がPDCAの良いサイクルになってきて職員指導力向上につながっているのは素晴らしい評価できる。 ・先生方はお忙しいのに、自身の指導力向上のため努力もされていれ感謝しありません。 ・グルグルウィークは先生方の授業力向上につながっていると思うが先生方の時間的余裕がないとできない取り組みだと思う。教員不足の中無理のないように進めてもらいたい。 ・学校訪問中、低学年の子が休み時間に校長室へ来て自分が覚えてきた九九を聞いてもらったり、音楽を聞いてもらったりしているのを見て、とてもいいなと感じました。先生と生徒の関わりが多くもていて温かい学校だと思います。</p>	<p>・家庭学習の強化週間が終わると、自主学習プリントコーナーに向かう子どもがだいぶ減ってしまっていたことをふまえ、自主学習プリントを子どもたちが進んで取り組むことができるような取組にしたり、プリントそのものの質や量を精選していく。 ・ぐるぐるウィークのように教員がお互いの授業を見合うことを習慣化できるようにしていく。 ・校長室へ行き校長先生に九九の定着度テストを受けているように、担任外の先生やボランティアさんにも協力してもらいながら学校全体で子どもの基礎学力を底上げしていけるようにしていく。</p>
ICTの活用	<p>①(教諭)授業の中で、児童がクロームブックを使った学習を1日1回以上行う。(教諭以外の教職員)教育活動で、日常的にクロームブックを使う ②ICT支援員と連携し、ICTを使った授業改善に努める。 ③高学年は、日常的にクロームブックを持ち帰り、学習型の活用をする。 ④低学年は、生活科などで課題を設定し授業と家庭学習との連携を図り、連続型の端末活用を行う。 ⑤中学年は、共同制作を始め、日常的に1人1台端末を活用した授業を行う。 ⑥情報モラル教育を全校で実施する。□</p> <p>(成果と課題) ○どの学年も端末を活用した授業をほぼ毎日実施し、ミライシードのオウリングを始め、Jamboardやスライドを活用した授業も行うことができた。 ○ICT支援員と協力し、授業の中で活用できるスライドの作成や個別最適な学習に近づけるための授業支援など、共働的な取組を実施できた。 ●ICT支援員の活用として、授業支援などを行っていただいたが、同月で同じ学級の支援に入ってもらえず、偏りが出たため、全学年の全学級に入ってもらえるように体制を組むと支援の幅が広がると感じた。 ●1人1台端末の活用もどの学年も積極的に取り組んでいたが、教員によって使用頻度に偏りが見られたため、同学年の教員間でICT活用事例の共有などを行い、今後は教員間でのICT活用の差を縮めていきたい。</p>	<p>・子どもの様子をみていると、検索したものをコピーしたり自分が使いたい部分だけをコピーして張り付けたりと想像以上に使いこなされていて驚きました。 ・子どもたちはクロームブックをうまく使い、タイピングもいつの間にか上達し、楽しく習得していると思う。 ・クロームブックを使って問題もどンドン解いて積極的に自主的に取り組んでいる。 ・教員間でICT活用の差を縮めようとして先生方も努力をしてくださることにとても感謝します。 ・ICTの活用が子どもたちの日常になっている。スクリーンが子どもたちの席によって見えづらい時もあるようなので見えているか確認をお願いしたい。 ・クロームブックの取り扱い、情報モラルについて定期的に子どもたちに指導してほしい。 ・ICTは必要な時代とは思いますが、先生方の仕事が増えているものも気になる。 ・親がクロームブックの使い方や内容などを把握できているのか ・クロームブック活用はとてもよいが、学童にはみんながクロームブックを使える環境が整っていないので、クロームブックを使った宿題が多いと学童の子どもたちは大変かもしれない。</p>	<p>・スクリーンが見えにくい児童の対応について、座席の配慮のほかに、スクリーンを使用するときはカーテンを閉めるなどの環境整備の声掛けを行っていく。 ・情報モラルについて、年に1回外部の講師を招いて情報モラルについての講義を行ってもらっている。保護者向けにも発信しており、次年度も同様に行っていく。また、学年問わず道徳の授業などでネットモラル関係の授業や資料の配布などを行い、情報モラルに関しての知識の推進を行う。スクリーンが見えにくい児童の対応について、座席の配慮のほかに、スクリーンを使用するときはカーテンを閉めるなどの環境整備の声掛けを行っていく。</p>
	<p>①不登校・不登校傾向の児童の把握し、校内での情報共有を行い支援体制を整える。 ②不登校児童理解シートや家庭訪問シートを活用し、どのような支援や対応を行っているのかを記録し、今後の支援に活かす。 ③保護者と密に連絡を取り、必要に応じてSC・SLSにつなげる。 (成果と課題) ○毎月の部会や職員会議での情報共有を行い、学期ごとに今後の対応について校内全体で検討することができた。 ○昨年度に続いて理解シートや家庭訪問シートの取組みを行った。継続していきたい。</p>	<p>・日ごろから学校全体で不登校に関する情報を共有し、登校しぶりに対する早期対応をされているのがわかります。 ・リモートで担任と会話できるのは良い取り組み。不登校児童が毎日の授業をリモートで受けられるとよい。授業を受けていなくても学校とつながっていると考えるのではないかと。 ・昨年度に比べると減少したというのは先生方の地道な努力のおかげだと思います。 ・理解シートや家庭訪問シートの継続などが、不登校の減少、長期欠席児童の減少につながっていると思う。 ・不登校の原因が家庭が学校か本人によるものか周囲の影響が集合の難しく繊細、これからも取り組</p>	<p>●2学期以降は対応が担任任せになることが多かった。ケース会議を開くなどしたが進展がみられにくかった。保護者への外部機関との連携をどうするか大切だが、外部機関までの送迎などが必要になると、難しいところもある。 ●けやき教室のほつとサロンの案内を毎月送付したが、参加していただくことは難しかった。保護者が動いていただくためにどうするかを考えることも必要。ただ、保護</p>

<p>長欠減少</p>	<p>○不登校児童の中で、放課後リモートで担任と会話するなど、ICTを活用したつながりもてるようになった児童もいる。 ○SOC・SLS等つながりをもつことができた。 ●登校しづりがあった際、対応や支援をしているものの、不登校になる児童の数は減らすことが難しかった。 ●長期休暇(夏休み)を境に2学期から学校に来れなくなったり、来にくい状況になる児童がいた。さらに保護者との連携を密にする必要がある。</p>	<p>みを継続してください。 ・学校の対応が可能なら、オンラインで授業中の風景を見ることができるようにはどうか ・不登校の児童とスイッチを使って連絡をとったり、ゲームをしたりサッカー観戦したりしている。そこから交友関係を広げようまくいけばよいなと思っています。 ・夏休みの間にクロムブックを使ってクラスのみんなとつながれる日を作るのはどうか ・長欠が減少したことは先生方のためにも努力のおかげだと感謝します。 ・不登校で社会人になった子が「心をかけてくれたのは先生だけだった」と話をしているのを聞き、その努力もいつかは報いられるのだらうと思います。</p>	<p>者によっては、現状でよいと思われている方もいるため難しい。 ●急な対応や日常的に児童にかかわれる職員が必要、2学期、3学期は、行事に追われ、人員不足といったこともありなかなか腰を据えて取り組むことの難しさに直面した。 ○学力不振から不登校ぎみだった児童が学習支援の時間をとることによって、自信が付き、欠席が減っていった。児童の現状を把握し、欠席の要因となっているものを取り除くような支援を今後も続けていきたい。</p>
<p>地域連携</p>	<p>①学校支援ボランティアの活動を地域コーディネーターと連携し、子どもたちの健やかな育成を図る。 ②学校運営協議会による熟議の充実と学校運営の改善に向けて協働して取り組む。 ③学校だより、ホームページで学校の取組を発進し情報共有を図る。 ④地域の方に協力をいただきながら、子どもたちの校外活動をコロナ前の状態に少しずつ増やしていく。(成果と課題) ○週2回算数で学習ボランティアに入っていたき、きめ細やかな支援をしていただいた。子どもたちもボランティアさんには安心してわからないことを聞くことができた。また、家庭科や図工にもたくさんの方にボランティアに入っていたき、担当教諭も授業をスムーズに進めることができた。 ○保護者駐車場の新設や樹木伐採など運営協議会委員を中心に迅速に対応していただいた。 ○地域の方のご協力でいろいろな体験を行うことができた。 ○学校だより平均月3回発行、ホームページへは週1回発信することができた。 ●ボランティアの人数が増やし、活動が負担にならないようにしていく。</p>	<p>・年々算数ボランティアに入ってもらえる人が減っているため、全クラス週2回の人員確保ができるようにしていきたい。 ・学習ボランティアの方に安心して開ける環境づくりが素晴らしいと思う。質問することをまず褒めてあげると、また気軽に質問してくれると思う。 ・まちづくり協議会地域活性化部会のボランティア活動推進事業でのサポートに取り組んでいる。引き続き取り組んでいきたいと思います。 ・学校側からの学校の設備・環境面での困りごとにとでも迅速に対応していただいた。 ・ボランティアなんてできないと思っている人が多いと思う。そういう人をどうやって学校支援へとつなげていくかが課題 ・学校関係はもっと多くのボランティアの人が必要だと思う。欲・得を捨て「利他」の精神で参加してくれる人が多く出て来てくれることをお願いします。 ・本年度も多くのボランティアさんのお力をお借りできたことに感謝です。 ・先生方が地域の方と親しく接して下さったおかげで、強力な助っ人を得られました。 ・来年度に向け一人でも多くのボランティアさんを増やせるように私たちも努力したいと思います。 ・学校を地域の子を我が子のように見守ってくださる大勢の方々に感謝 ・本当にこの小学校はたくさんの方々に見守られまたボランティアに参加していただき、感謝です。 ・子どもたちからも授業のサポートとしてボランティアの方々に入っていたき、楽しく勉強できていると聞きます。 ・ボランティアさんばかりに頼って当たり前と思わないよう、いろんな人(親)も巻き込めればと思っています。例えば全員であいさつ運動に取り組むなどPTAで考えずすめていきたいです。 ・親が子に教えるより従姉弟(中学生)に教えてもらった方が効果的だったこともあるので、学習会に中高生が参加してもらうのはよいと思います。教えてくれた従姉弟も楽しかったと言っていたので、教える方、教えられる方どちらにもメリットがあると思います。</p>	<p>地域の方の様々な支援は、本当に助かっている。今年度子どもたちが落ち着いて過ごすことができたのも、地域のみなさんのお力があることである。しかしながらそれが負担になってしまっているのは申し訳なく思う。学校だよりで学校からもボランティア募集の発信をしていきたい。 ・コロナでできていなかった体験活動が地域の方のご協力でたくさん復活することができた。「非認知力」の重要性が言われている今、地域の方にお手伝いいただき、これからも子どもたちにいろいろな体験をさせていきたい。 ・地域の方が訪れやすい学校にしていきたい。</p>
<p>人権・特別支援教育</p>	<p>○人権教育推進計画(人権教育カリキュラム)に基づいた人権教育の推進 ②人権教育授業研究(1年)や学級づくり交流会(年2回) ③平田野中学校区夏季人権教育研修会、校外の人権教育研修会への参加 ④児童一人一人に応じた支援を行うためのケース会議・支援会議 ⑤児童の情報共有(毎職員会議、打ち合わせ等) ⑥個別の支援計画の作成・保護者や専門機関との連携 ⑦「特別支援教育は教育の原点である」との視点に立った教育環境作り ⑧国際理解教育の研修・推進(成果と課題) ○推進計画に基づき、各学級、各学年ともに社会性の基礎を育む自己有用感を高める活動に重点的に取組み自己肯定感の向上に努めてきた。学校アンケート「学校は楽しいですか」(87%⇒91% 4%UP) 学校アンケート「自分にはよいところがありますか」(74%⇒78% 4%UP)また、授業参観で人権教育の授業を公開し、保護者への啓蒙を図ることができた。 ○人権教育授業提案(1年)を平田野中学校区の公開授業と兼ね人権教育の研鑽を積み人権意識を高めると共に、中学校区人権教育カリキュラムにおける幼・小・中の連携を再確認することができた。学級づくり交流会において人権課題を共通認識し日々の取組に活かすことができた。 ○人権・特支部が中学校区夏季研修に参加し、校区の人権課題を把握、共有することができた。また、校外での人権教育研修会に積極的に参加し、職員一人一人の人権感覚の向上に努めることができた。 ○ケース会議・支援会議をもち保護者と連携したりSCや専門機関につなげたりしながら支援にあたることができた。 ○なかよし学級の提案授業から授業のユニバーサルデザインについて学ぶことができた。 ○各クラスで国際理解教育の授業に取り組み、違いを理解し受け止めることの大切さについて考えさせることができた。また、国際教室担当教員と連携し国際教室で学ぶ児童について知ったり出会い学習を通して多文化にふれたりして相互理解を図ることができた。夏季教職員研修において人権教育アドバイザーを招き外国につながる子どもたちや保護者の抱える人権課題について知り、人権感覚を高める機会をもつことができた。</p>	<p>・国際理解教育の授業に取り組み、多文化に触れて相互理解を図ることができたのは、将来の糧となり、素晴らしいことだと思う。 ・特別支援学級のお子さん一人ひとり特性があり、その子の特性に合わせてかわりを持たなければいけないので、人員確保が必要だと思う。 ・特別支援学級のお子さんの特技を紹介するなどして、みんなに知ってもらい、分け隔てのない環境を作っていくほしい。 ・国際化が進んでいる中、いろんな国のことを知るの相手のもも知れてよいと思えます。給食でもいろんな国の献立があると聞きました。 ・低学年の生活科支援に入っているとき、あるグループで男女が対立、男の子の中から「料理は女の子がしたい。ぼくたちは男のだから」という発言がありびっくりしました。また、出来上がったものを取り合いい、「じゃんけんできようか」と声をかけても納得できず、いつまでももめていました。高学年になるとこのようなことはおそらなくなると思うのですが、その学年に応じた学校生活のあり方を学ぶ機会が必要なのではと思います。 ・外国籍児童の対応は多岐にわたると思えますが、まず言葉の壁、生活習慣の違いによる孤立、いじめが考えられます。大変ですが、よろしく願います。 ・支援級の先生方には頭が下がります。一步一步、本当に一步一步ですが確実に見える形で成果をあげています。 ・支援級では一人ひとりと先生との関係が大変よくみえていてほほえましくうれしいです。すべての先生が順番に支援級に入って学んでほしいとも思っています。</p>	<p>・自己有用感を高める取組を意識して実践する中で自分に自信をもち、自分も相手も大切にしようとする意識が育つと考える。異学年交流など積極的に学校全体で行ってほしい。 ・各学年で男女共生教育を行っているがまだまだ固定観念で見えてしまう現状がある。発達段階に応じて継続的に取組んでほしい。 ・個別の支援、対応に必要な子どもたちが支援学級だけでなくどのクラスにもいる。きめ細やかにひとりひとりを支援していくためにもスタッフの増員は急務である。 ・特別支援教育はユニバーサルな授業づくり、どの子どもも安心して過ごせる学級づくりにつながる教育であると捉える。教員への特別支援教育の研修を進めるとともに、支援学級の授業を公開したり支援級における授業を受け持ったりする機会を設けるなど職員の学びの場を作っていくほしい。 ・互いを知りあう機会として、支援学級と原学級の交流会をなるべく早い時期に行っていくほしい。 ・外国につながる子どもどもも増え、今後もその傾向は続くと思われる。そんな社会の中で、国際理解教育は必要不可欠である。低学年の段階から多文化にふれ、違いを受け止める素地を形成していきたい。 ・国際教室に通う児童がどのような学習をしているかを知ること、相手のことを知る一歩となる。今後も国際担当教員と連携しながら国際教室で学ぶ子どもたちや学習の様子について知る機会を設けていきたい。</p>